

名詞の迂言表現 押韻技法の観点から lip の場合

武市 修

0. はじめに

中高ドイツ語 (Mittelhochdeutsch = Mhd.) の主要な文学作品は脚韻を絶対必要条件とし、強弱の音節交代を基本とする一定のリズムをもつ行を連ねた韻文学である。ジャンルによっては4行から7行でひとつの節を成す場合もあるが、いずれにしても、韻を踏みリズムを整えるために詩人たちは許された範囲内でさまざまな言語表現手段を駆使した。例えば、今日の英語に残っている“*Do you know him?*” “*Yes, I do.*” の *do* のように、同じ動詞の反復を避けるための *tuon* (= nhd. *tun*; eng. *do*) による代動詞表現や、非人称主語 *ez* の代わりに *mîn dinc* を用いるなど、一語で表わすことのできるところを複数の語を用いて書き換える迂言表現、さらには動詞 *haben* の代わりに *hân, lâzen* (= nhd. *lassen*) の代わりに *lân, liget* (= nhd. *liegt*) の代わりに *lit, saget* (= nhd. *sagt*) の代わりに *seit* を用いるなどのいわゆる縮約形の利用など、韻律上の必要性からと見られる独特の表現は多岐にわたる。個々の文法事項としてはパウル (Hermann Paul) の『中高ドイツ語文法』*Mittelhochdeutsche Grammatik* などに詳しく述べられている部分もあるが、このような表現技法を全体的に明らかにした研究はこれまでになく、筆者は押韻技法の観点からこれらの現象について、主として『ニーベルンゲンの歌』、『イーヴァイン』、『パルツィヴァール』、『トリスタン』、『イタリアの客人』の主要5作品を中心に用例を分類し、その研究の中間的総括として『中世ドイツ叙事文学の表現形式』を上梓した(※1)。

しかしその研究はまだ道半ばであり、名詞の迂言表現については *dinc, êre, liebe, geschicht, gewin* の5つの語を扱っただけである。その続きとしてさらにその

1 武市修『中世ドイツ叙事文学の表現形式——押韻技法の観点から』、近代文芸社 2006年。

他の名詞まで考察の対象を広げ、最近の論考では *mære* の用例を分析したが^(※2)、本稿では広く迂言表現に用いられる名詞 *lip* (nhd. *Leib*) を取り上げてみたい。

1. 古高ドイツ語 (Althochdeutsch = Ahd.) における *lip* の用法

韻律とリズムの観点からの考察ということなので、先ず、本格的な脚韻文学の先駆けである Ahd. 期の代表的作品であるオトフリト (Otfried von Weißenburg) の『総合福音書』*Evangelienbuch* から始めよう。今日のドイツ語では *Leib* は男性名詞である。しかしその Ahd. 形 *lib* は辞書には男性の表示もあるものの、オトフリトではすべて中性名詞であり、91 例見られる。その意味はケレ (Johann Kelle) によれば^(※3)、*Leben* すなわち「生命」「命」からキリスト教の重要概念である「永遠の生」を表わすこととなり、さらに、比喩的に *Lebenskraft* 「生命力」、*Lebenszeit* 「人の一生」、*Lebenswandel* 「行状」「品行」、また稀に *Geschick* 「運命」へと広がる。そして *lib* 自体にはほとんど意味がなく、ただ「人の書き換え」に用いられる迂言表現はわずか次の 2 例^(※4)に過ぎない (下線は筆者、以下同様)。

- 1) „Hera hôret“, quad er, „wib! ni riezet ir thaz mînaz lib, (IV.26,29)

「聞いておくれ」と彼は言った、「女たちよ、

私のために泣かないでおくれ [……]」

- 2) Gihugi mit êragrehtîn thînes scalches, druhtîn,

joh lâz thaz lib mînaz in scôni rîchi thînaz! (IV.31,19-20)

主よ、どうか憐れみをもって、あなたの僕を思ってください。

そしてこの私を栄光あるあなたの御国へ行かせてください。

この 2 箇所 の *lib* はピーパー (Paul Piper)、ケレとも、この作品のそれぞれのコン

2 武市修『「イーヴァイン」における名詞 *mære* の用法——押韻技法の観点から』、関西大学『独逸文学』第 52 号 (2008)、23-49 ページ。

3 Vgl. J. Kelle: *Glossar*, S. 358b – 360a.

4 本稿の引用原典には長音符が付いていないが、ここでは行の流れを示すため、ピーパーの編集した版に従ってそれを付けた。

コーダンスにおいて「人の書き換えに用いられて」という項目に分類している(※5)。

オトフリトは4つの福音書を総合してキリストの事跡を伝え、しかも従来のゲルマンの頭韻ではなく脚韻を踏んでそれを表わすという困難な課題に取り組んだので、押韻には相当苦勞している。その詩行は上に示したように、1行が前行と後行からなりそれぞれの終りの母音を揃えるというものであった。例2)の2行目では例1)の語順と異なり、所有代名詞に中性4格の語尾が付いた *mīnaz* と *thīnaz* をそれぞれかかる名詞の後ろに置いて両語で押韻している。韻律学上正式な脚韻は詩行の最後の主強音がある音節から行末までのカデンツの部分で協和するものであるが、オトフリトでは前行と後行の最後の母音だけ揃え、しかもそれが *guati : arabeiti* (V. 9,34) のように変化語尾ということも稀ではない。Ahd. 期はアクセントのない語末の母音がまだ -e に弱化せず、完全母音を留めているので、彼はこれを大いに利用したのである。

lib による押韻に関してみると、91例のうち56例で *lib* の何らかの形が行末に置かれている。とりわけ3格 *libe* が44例中40度と圧倒的に多く押韻に用いられ、後に見る Mhd. の諸作品と大きな違いを示している。その押韻相手は所有代名詞に語尾の付いた *thine* が14度(※6)、*sine* が5度(※7)と多く、動詞 *klīban* の接続法現在 *klībe* が5度(※8)あり、名詞 *wīb* の3格 *wībe* とは3度(※9)韻を合わせているに過ぎない。また、*liebe* と4度(※10)、*[gi-]liabe* と2度(※11)、*ungiloubige* と1度(※12)など不完全韻、さらには *libe* どうしの同語韻も1例(※13)あるなど押韻の困難さを示している。*lib* はまた2格 *libes* でも9例中指示代名詞 *thes* と2度(※14)、*liobes*, *wībes* と1度ずつ(※15)の4度韻を踏んでいる。

5 Vgl. P. Piper, S. 259b; Kelle, S. 360a.

6 V.23,28. 58. 130. 172. 184. 194. 206. 220. 232. 242. 256. 270. 284. 296.

7 L.77. IV.11,5. V.12,98. 20,17. 23,280.

8 I.2,51. IV.37,21. V.1,14. 3,2. 3,20.

9 I.16,18. IV.31,16. V.8,58.

10 IV.37,14. V.20,45. 23,55. 188.

11 III.14,8. V.20,39.

12 I.4,43.

13 III.19,37. 他 に *giscrive* と2度 (I.1,17. 2,11)、*inscribe* (I.20,36)、*nide* (II.3,62)、*blide* (II.24,41) とそれぞれ1度ずつある。

14 L.74. H.16.

15 I.16,20 と I.8,15.

このように lib は語尾の付いた語形ではさまざまな語と押韻しているが、語尾のない1格と4格形は38例中12度(※16)行末に来て、その押韻相手は例1)のようすべて wib である。

同じ Ahd. 期の作品でもオトフリトより少し前のタツィアーン (Tatian) による福音書のドイツ語訳は、何人もの修道士によってラテン語から分担翻訳された散文訳であり、lib に関してみると、これはラテン語の *vita* の訳語であり、46度現われる中で人の言い換えに当たる用法は1例も見られない。ちなみにその性はオトフリト同様中性である。参考に1例挙げておこう。ここは *Lebenszeit* の意味である。

3) *Thô quad imo Abraham: kind, gihugi bithiu thû intfiengi guotiu in thînemmo libe inti Lazarus so sama ubiliu: (Tat.107,3)*

その時アブラハムは彼に言った。「子よ、思い出すがよい。お前は生きて
いる間に良いものを受けたが、ラザロは同じ程度に悪いものを受けたの
だ [……]」

2. 中高ドイツ語における lip の用法

Mhd. の作品ではこの名詞はどのように用いられているのだろうか。Ahd. の lib は Mhd. では語尾のない場合、末尾の子音が硬化して lip となり、名詞の性も中性はなく男性のみになっている。辞書の分類(※17)によれば、名詞本来の意味は

- a) 内的な *Seele* 「魂」(※18)に対する外的な *Leib* 「肉体」
- b) *Gestalt* 「姿」「容姿」
- c) 健康であれ病気であれ、強い弱いに拘わらず、また生きていようが死んでいようが、具体的な *Leib* 「体」
- d) *Leben* 「生命」「生活」「人生」

16 例1) 以外に1格が II.14,84、4格が I.11,7. 20,19. III.10,1. 19. 17,13. IV.34,25. V.8,41. 46. 57. 16,30.

17 BMZ,I,1002 – 1004.

18 上の辞書と同じ編者ベネッケの『イーヴァイン辞典』でも同じ分類をしているが、後者では *Seele* の代わりに *Herz* としている。しかし内容的には変わらない。

である。そしてこれら以外に第5のグループとして、「人全体」を表わす場合が分類されている。そしてそこには、英語の *body* や古フランス語の *corps* (※19) などと同様 *min lip* で *ich* の代わりのように、単に人称代名詞の書き換えに用いられるだけのこともしばしばあるとして、叙情詩、叙事詩を問わずさまざまな作品から多くの用例が挙げられている。主要な叙事作品の用例は後で見るとして、先ず、そこには挙げられていないルードルフ・フォン・エムス (Rudolf von Ems) の『善人ゲールハルト』*Der guote Gêrhart* から4例見てみよう。

4) *geëret sî der sêuze Krist / in des namen komen ist /*

mir dîn sældenrîcher lip; / geëret sî daz reine wîp /

|x̄ x | x̄ x | x̄ x | x̄^ | x|x̄ x|x̄ x | x̄ x | x̄^ |

von der dîn lip mir wart geborn. (g.Gerh.4773-77)

x | x̄ x | x̄ x | x̄ x | x̄^ |

やさしいキリストが崇められますように、その御名において祝福に満ちたそなたが私に戻ってきたのだから。清らかな女性が讃えられますように、その方のお蔭でそなたが私のために生まれてくれたのだから。

5) *Dû næme durch den schepher dîn / ein edel rîche künigîn /*

mit triuwen dînem libe / und gæbe si ze wibe / ...

x | x̄ x | x̄ x | -|x̄^ | x | x̄ x|x̄ x | -|x̄^ |

dô minntest dû durch sine kraft

got für dich, für Kindes lip (6695-98, 6702-3)

お前はお前の創造主のために、高貴で富貴な王妃を誠実にみずからの許に引き取り、[息子に] 妻として与えた [……]

その時お前は神さまをその御力ゆえに自分自身よりも、

お前の息子よりも大切にした。

例4) には *lip* が2度現れているが、名詞本来の意味はほとんどない。先ず *dîn*

19 グリム (J. Grimm) は、古フランス語の *corps* も *lip* 同様 *mon corps* で *ich* を、*ton corps* で *du* を意味するが、この表現はずっと古いドイツ語本来の言い回しであり、すでに Ahd. の文献にも見られるとして、例2) に挙げたオトフリートの個所を示している (Vgl. Grimm: *Grammatik* 4,297)。

sældenriher lip は du, diu sældenriche の代わりであり、*du, die Glückselige* の意味である。この書き換えによって lip は次行の wip と韻を踏み、さらにこの行の下に韻律を示したようにリズムは強弱交代のスムーズな流れになっている(*20)。この2行とも強弱の音節からなるタクトが3つ続き、最後のタクトの弱音が休止する典型的な宮廷叙事詩の韻律を示している。din lip も du の代わりであり、こもこの書き換えによって行のリズムが整えられている。

例5) では lip の3格 dinem libe が dir の代わりをして wip の3格 wibe と押韻している。カデンツ（詩行の最後の主強音から後ろの部分）は zweisilbig klingend（主強音ひとつの長音節と二次強音ひとつの短音節からなる2音節による押韻の仕方）となっている。これも宮廷叙事詩でふつうに見られる行末である。最後の Kindes lip は意味上は din kint の代わりである。

それでは以下で Mhd. の主要作品における lip の用法を詳しく見て行こう。

2.1. 『ニーベルンゲンの歌』に見られる lip

『ニーベルンゲンの歌』では lip の語形は192度現われ、そのうち179例で行末に置かれて押韻相手は merwip3度を含めすべて wip である。語尾の付いた形は2格 libes が11度、3格 libe も11度見られるが、これらの形では一度も押韻していない。それにはこの作品の本質に係わる理由がある。まずはこの作品からいくつかの押韻例を挙げてみよう。

- 6) si wart im só sin lip.
er næme für si eine niht tûsent anderiu wip. (Nib. 629,3b-4)

彼女は彼にとって命と同じになった。

千人の婦人とも彼女ひとりを取り替えることなどしなかったであろう。

- 7) só het er dar inne krefte genuoc,
wol zwelf manne sterke zuo sin selbes lip. (337,2-3)

20 宮廷叙事詩ではふつう1行は強弱の音節からなる4つのタクトで構成され、行頭に1音節から2音節のアクセントのない行首余剰音(Auftakt)が置かれることもある。そして最後のタクトは一般に弱音が欠けて1音節の強音で終わっている。Mhd. の叙事詩の韻律については『中世ドイツ叙事文学の表現形式』13-14ページ参照。

こうして彼は隠れ蓑をかぶると、並々ならぬ強さを、すなわち
彼自身の力の上に優に十二人力の強さを得たのであった。

8) si sâhen vor ir sitzen vil manic schœne wip.

dô pflac niuwan jâmers der Kriemhilde lip. (1228,1f.)

彼らは彼女の前に数多くの美しい女性が坐っているのを見た。

しかしクリエムヒルトは、ただただ悲しみに沈んでいた。

9) mit ir kom hêrlîche vil maniges edeln recken lip. (1303,4)

彼女とともに多くの生まれ高き勇士たちが威風堂々とやって来た。

6) の *sin lip* は名詞本来の「命」の意味であり、ここも押韻相手は *wip* で、この *wip* は複数4格である。数詞は名詞的にも形容詞的にも用いられ得る。Mhd. では13以上の数詞は語尾変化せず、また形容詞の付いた名詞を伴うと、多くの場合名詞的に用いられ、名詞の方が部分の2格になる(※21)が、ここはそれでは韻を踏めないで、部分の2格でなく4格になり、数詞は名詞にかかる形容詞的用法になっている。

7) の *lip* も *wip* と韻を踏んでいる。この *lip* をバールチュ (Karl Bartsch) は「人の言い換え」の項目に分類している(※22)。*sin* は人称代名詞 *er* の2格で、それと同格の *selbes* とともに *lip* にかかっているが、*lip* には意味がなく、この個所の具体的な意味はデ・ボーア (Helmut de Boor) も脚注で述べているように *die Stärke von zwölf Männern zu seiner eigenen hinzu* である。数詞 *zwelf* は前の例と同じように *manne* にかかる形容詞的用法で、*zwelf manne* が複数2格で *sterke* にかかっている。

ところでこの例では *lip* 自体は3格なので Mhd. では本来は語尾の付いた *libe* となるべきところであり、押韻相手の *wip* も3格なので *wibe* にすれば韻律上は何の問題もない。そうすると行末のカデンツが例5)の3、4行目のように2音節の *klîngend|[´]-|x[^]|* となり、この後行は4音節になる。ところが「ニーベルンゲンの

21 Vgl. Paul: *Mittelhochdeutsche Grammatik*, 19. A., 2. Druck, §214. 例えば *tûsent* が形容詞や所有代名詞の付いた名詞を伴う場合、この作品でも前置詞 *mit* の目的語になる1例(688,2)以外はこの個所以外の8個所すべての例で *tûsent wærtlicher man* (597,4) のように複数2格になっている。

22 Vgl. K. Bartsch: *Der Nibelunge Nôt* II.2, S. 198.

歌』は後行の行末では2音節の *klingend* を避けている。

この作品の韻律上の構成はとくにニーベルンゲン詩節と呼ばれており、前行と後行からなる長行4つで1詩節をなす。1行中の前行は1詩節の4行すべてで4つのタクトからなり、例5)の3、4行目のように柔らかな二次強音で終わることも多いが、ホイスラー (A. Heusler) 以来の伝統的な韻律論に従えば、後行は1行目から3行目までが3つのタクトで最後のタクトが休止しているとみなされ、4行目のみ4つのタクトが満たされ、原則として4行とも主強音で終わる男性韻で行を力強く締めくくる(*23)。ここもその理由から語尾 *-e* を省き1音節の男性韻で力強く終わっている。この点は1行4音節で2音節の *klingend* なカデンツで終わることが多い宮廷叙事詩の場合と響きが大きく異なる。ここに、聴衆に力強く訴えかける英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』の形式上の特徴を見ることができる。

8) では *lip* とその冠詞のあいだに人名 *Kriemhilt* の2格が挟み込まれ、やはり *lip* には意味がない。押韻とリズムのためにこのような表現になっている。Mhd. では女性の人名もこのように1格以外は語尾が付くことが多かった。

9) では *vil maniges edeln recken* は集合的概念を表わす単数2格の名詞で *lip* にかかる。これで *viele edle Krieger* を表わし、ここも *lip* には意味がなく、ただ次行の *wip* と押韻するためだけの役割しかない。

バルチュはその辞書で *lip* について *Leib, äußere Erscheinung, Leben* という具体的な意味の分類と並べて、人の書き換えに用いた例を分け、例7)のように人称代名詞の2格あるいは所有代名詞や冠詞が付いて *min lip* で *ich* の代わりをするような用例として56個所、例8)や9)のように人名や名詞の2格を伴う用例として49個所、合計105個所(*24)を挙げている。

23 時に *tragen:sagen* (344.3:4) や *degen:pflügen* (1828,1:2) のように弱音で終わることもあるが、これは前の音節が短母音で終わる開音節の場合で、この場合はそれぞれの音節が八分の一音符に相当するとされ、主強音のある前の音節とあわせて四分の一音符に当たるひとつの強音節とみなされる。

24 Vgl. Bartsch: *Der Nibelunge Not* II.2, S. 198. この辞書にはC写本に基づいた個所で我々のテキストとは異なる個所も一緒に挙げられているが、上の数字にはこれらの用例は入っていない。

2.2. 『イーヴァイン』に見られる lip

次に『イーヴァイン』における lip の用法を見てみよう。この作品には語尾のない1格または4格 lip は105度現れ、そのうち53度行末ですべて wip を相手に押韻している。また、3格 libe は26例あり、そのうち7度 wibe と韻を踏んでいるが、2格 libes は10度すべて行中に現れている。

ベネッケは『イーヴァイン辞典』で lip を中高ドイツ語辞典と同じ基準で分類し、人称代名詞の代わりに用いられる用例として18箇所を挙げ、その中に3格 libe が6例含まれている。そこからいくつか取り出して示してみよう。

10) „mir rietz niuwan mîn selbes lip“

„wer rietz dem libe durch got?“

„daz tete des herzen gebot.“ (Iw. 2348-50)

「私にそう勧めたのは他ならぬ私自身です」

「一体誰があなたにそう勧めたのですか」

「そうしたのは心の命令です」

11) ern ahte weder man noch wip,

niuwan ûf sîn selbes lip. (3225-26)

彼は自分自身のこと以外には

誰のことも気かけなかった。

12) ich mac wol clagen mîn schœne wîp: / war umbe spar ich den lip?

mîn lip wære des wol wert / daz mich mîn selbes swert /

zehant hie an im ræche, / und ez durch in stæche. (3995-98)

私が美しい妻を失ったことを嘆くのも当然だ。何故命を惜しむのか。

私は、私自身の剣ですぐさまここで私自身に恨みを晴らし、

剣でこの身を刺し貫くに十分値するであろう。

10)の2箇所 lip にはまったく意味がないというわけではないだろうが、ベネッケは mîn selbes lip を ich, dem libe を dir の意味だとしている(※25)。ここは例7)

と同じように、それぞれ ich あるいは dir では押韻できずリズムが整わないため、このような書き換えをせざるを得ないのである。

11) の *sin selbes lip* をベネッケは *sich* だとしている(※26)。ここは主語が *er* なので、人称代名詞の代わりではなく再帰代名詞 *sich* に相当するというのである。ところでこの文の動詞 *ahte* は弱変化動詞 *ahten* (nhd. *achten*) の直説法過去3人称単数だから、本来は *ahtete* となるはずだが、アクセントのない同じ音節が続く場合、行の強弱のタクトを整えるため *-te* がひとつ省かれることがある。これは語中音消失という現象で、Mhd. の文学では広く見られる(※27)。またこの動詞 *ahten* が他動詞として4格の目的語 *man* と *wip* と並び、自動詞として前置詞 *uf* + 4格 *sin selbes lip* をとっていることは、ベネッケが『イーヴァイン』第6版の注釈で述べ、他にも『パルツィヴァール』や『ニーベルンゲンの歌』などの用例を挙げているとおりである(※28)。

12) には *lip* が2度現れている。最初の *lip* は名詞本来の意味「命」であるのに対し、ふたつ目はベネッケも人称代名詞の代わりの項に分類しているように(※29) *ich* の代わりである。ただこの構文で面白いのは、5行目の *im*、6行目の *in* は実際は *mir*, *mich* であるのに、文法的には *min lip* を受けていることである。そのためにこの構文が可能となっている。つまり、この *lip* をあえて「身」としてこの個所を訳してみると、「私自身の剣がすぐここでこの身に私の恨みを晴らし、剣でこの身を刺し貫くに値するほど」ということになり、*lip* にまったく意味がないかという、そうとも言い切れない。ちなみに最後の行の *ez* は *min selbes swert* を受ける人称代名詞の4格で、他動詞 *stechen* の接続法過去形 *stæche* の主語は4行目の *mich* から *ich* を補って考えねばならない(※30)。

『ニーベルンゲンの歌』には *lip* は語尾の付いた3格 *libe* の形では一度も押韻していないことを上で見たが、『イーヴァイン』では *libe* は7度 *wibe* と韻を踏んでおり、そのうち6度は人称代名詞の代わりの用法の項に分類されている。その1

26 Ebenda.

27 『中世ドイツ叙事文学の表現形式』第二部第4章第4節参照。

28 Vgl. Benecke: *Iwein*, 6. Ausgabe, S. 298f.

29 Vgl. Benecke: *Wörterbuch*, S. 134.

30 『イーヴァイン辞典』の *ich stiche* の項目のこの個所に *daz ich min swert durch in stæche* としてそのことを示唆している (Vgl. Benecke: *Wörterbuch*, S. 221)。

例を見ておこう。

13) wand ich niemer werden kan / stæte deheinem wibe /

wan ir einer libe / durch die mîn herze vreude enbirt. (Iw. 6808-11)

|x̄ x |x̄ x |-|x̄^| x |x̄ x |x̄ x |x̄ x |x̄^|

なぜなら、私の心がそのために喜びを失うことになったひとりの婦人以外どんな婦人にも変わらぬ心を持つことなどできないからです。

ここも押韻相手は同じく3格の語尾が付いた wibe であり、これらの詩行は例5)の『善人ゲールハルト』からの用例と同じく zweisilbig klingend である。この例の3行目の ir は人称代名詞単数女性 si の2格で次行の関係代名詞 die の先行詞であり、einer は ir と同格で ir einer が lip にかかる。ir einer lip で *einem Weib* の意味であり、ここでは libe にはほとんど意味はなく、ただ押韻するためだけに用いられたものである。

2.3. 『パルツィヴァール』に見られる lip

この作品には lip は222個所現われ、そのうち124個所で行末に置かれ押韻相手は123個所で wip である(※31)。また、語尾の付いた3格 libe も36例あり、そのうち押韻個所20度すべてで wibe が相手である。他の作品と比べて libe での押韻が多い。これに対し2格は libs 3度、libes 12度とも行中で用いられている。これらの lip に意味があるのか、あるいは人称代名詞の書き換えなのか区別がつき難いところも多いが、書き換えと思われるいくつかの例を見てみよう(※32)。

14) sin lip was tugende ein berende ris. (Parz. 26,11)

31 唯一の例外は752,19で動詞 schriben の du に対する命令形 schrip である。

32 222例中どれだけがこの用法か筆者には定かでないが、BMZ には lip の Umschreibung の項目に『パルツィヴァール』から22例が引かれている。これは『ニーベルンゲンの歌』からの5例、『イーヴァイン』からの4例と比べると、きわめて多い引用数である。そのことからしてこの作品では lip が単なる書き換えに大いに利用されていることが推測できる。

彼は徳の実を付ける若枝でした。

15) / mit kleidern wol bereitet / was des hōhsten wirtes lîp. (45,22-23)

[……] この国の君主は立派な衣装を身にまとっていた。

16) daz Brôbarzære frouwen lîp / mit ir hulden wær mîn wîp, (220,1-2)

もしグローバルツのご婦人が自ら進んで私の妻になってくれたなら、

14) はパールチュも注釈で述べている(※33)ように *sin lîp* で *er* を意味する。『パールツィヴァール』でも *lîp* による言い換えの場合、このように *lîp* の前に所有代名詞が置かれて人称代名詞の代わりをする表現がはるかに多いが、15) では9) の『ニーベルンゲンの歌』の例と同じように名詞の言い換えであり *lîp* にはほとんど意味がない。*des hōhsten wirtes lîp* は *der hōhste wirt* の代わりであり、*der Landesherr* の意味である(※34)。次行の *wîp* と押韻するためこんな表現になっている。

16) の *Brôbarzære frouwen lîp* も同様で、*Brôbarzære* は *Brôbarzær* 「ブローバルツの人」の複数2格で *frouwen* にかかり、*frouwen* も *frouwe* の単数2格で *lîp* にかかる。ここも *diu frouwe von Brôbarz* をこう書き換えることによって押韻し、強弱のタクトがスムーズに交代している。なおこの例に見られる接続詞 *daz* は、Nhd. にはない *unter der Bedingung, dass* の意味である。

次に *lîp* に形容詞が付いた例と不定関係代名詞の2格が付いた唯一の例を挙げてみよう。

17) gein slage saz der betwungen lîp. / der sigehafte sprach „mîn wîp /

mac nu beliben vor dir vrî. / nu lerne waz sterben sî.“ (212,29-213,2)

敗者はとどめの一撃を覚悟した。勝者は言った「我が妻はこれでお前に苦しめられずに済む。さあ、死がどんなものか知るがよい」。

18) swes lîp sîn zürnen ringet,

des sêle unsanfte dinget,

swie kiusche er sî und wære. (113,23-25)

33 Vgl. Bartsch: *Parzival*, Anm. zu I,761.

34 Vgl. Martin: *Parzival*, Anm. zu 26,11.

彼 [イエス] の怒りを軽んじる者は
 どれほど純潔であり、また、あったとしても、
 その魂は最後の審判の時に救いを得られない。

17) の lip はパールチュも指摘しているように、人の書き換えである(※35)。ここは次行の *der sigehafte* と同様、過去分詞 *betwungen* が形容詞として名詞的に用いられた *der betwungene* としてもよいところであるが、wip との押韻のためこのように lip によって書き換えられている。18) の *swes lip* についてもパールチュは不定関係代名詞 *wer* の意味であると注釈している(※36)。次行の *des* はそれを受ける指示代名詞の男性2格である。

ところでこの作品には lip による書き換えではないが、lip のきわめて稀な複数3格形が1例現われているので、最後にそれを見てみよう。

19) nu müeze ich flüstedlichen spot / ze bēden liben immer hân /
 von siner kraft ob missetân / *disiu frouwe habe, [...]* / (269,18-21)
 もしこのご婦人が [あの時] 過ちを犯したのであれば、私はこの世でも
あの世でも永久に神さまから苦しみとあざけりを受けるがよい。

この *ze bēden liben* についてはパールチュとマルティンはそれぞれ *in beiden Leben, irdischen und jenseitigen* および *im Diesseits und Jenseits* と脚注を付けている(※37)。辞書にはとくに複数という分類はしていないが、引用された用例の中で複数例としては唯一これだけ挙げられ、*diessseits und jenseits des grabes* という説明がなされている(※38)。

2.4. 『トリスタン』に見られる lip

『トリスタン』には lip による迂言表現と見られる用法は非常に少なく、辞書

35 Vgl. Bartsch: *Parzival*, Anm. zu IV,1007.

36 Vgl. Bartsch: ebd., Anm. zu II,1647.

37 Vgl. Bartsch: ebd., Anm. zu V,1371; Martin: *Parzival*, Anm. zu 269,19.

38 BMZ,I,1003b,38-40.

には1例も引用されていない。しかしこの語による押韻については他の作品と似た傾向を示している。先ず、数少ない迂言表現とみなされ得る用例から始めよう(※39)。

20) ich hân dâ heime ein êlich wîp,
die minne ich als mîn selbes lîp / [...] (Trist. 8189-90)

私には故郷にれっきとした妻がおりまして、

私はその妻をわが身同様に愛しております [……]

21) Marke durch den arcwân, / daz er den neven und daz wîp
und allermeist sîn selbes lîp / sô hæte beswæret / [...] (14936-39)

マルケは自分が甥と后をそしてとりわけ自分自身をこれほど苦しみ、

[宮廷と国中に3人の悪評を立てることになった] 邪推のために [……]

22) ir hazzet êre unde wîp / und almeist iuwer selbes lîp. (18385-86)

あなたは名誉と奥方を憎み、とりわけご自身を憎んでおられるのです。

これら3つの例では lip にどれほど本来の意味が残っているのか、あるいはまったくの迂言表現なのか断定はできないが、いずれも例11)と同じように人称代名詞の2格とそれと同格の *selp* の2格が lip にかかり、それぞれほぼ再帰代名詞の代わりに役割を果たし、行末で wîp と押韻している。この作品には lip は118例あり、そのうち押韻は52度ですべて wîp が相手である。

次に lip に語尾の付いた形を見ると3格 *libe* は63例あり、そのうち23度押韻に用いられ、1例(※40)を除き相手は *wibe* である。この点『バルツイヴァール』と似た傾向を示している。また、単数2格形 *libes* は24例あり、1度だけ *wibes* と押韻している。3格の例と2格の押韻例を見ておこう。

23) diu gebalsemete minne, / diu libe unde sinne /
als inneclîche sanfte tuot, / diu herze vuoret unde muot. (16831-34)

39 ここで使用した『トリスタン』のテキストではウムラウトの長音を合字 (Ligatur) で表わしていないが、本稿では他の作品に合わせてふたつの長音に æ, œ を当てた。

40 16565のみ動詞 *getriben* の1人称単数現在 *getribe* である。

肉体と感覚を奥底から喜ばせ、
心をそして気持ちを養うかぐわしい愛

24) Minne envlammete den man / mit der schœne ir libes. (17595-96)

愛の女神はこの男の心を彼女の美しさによってかきたてた。

23) の構文はいささか複雑である。2行目の diu は minne を先行詞とする関係代名詞で、libe, sinne はともに3格である。sanfte は副詞で、ふつう人の3格と sanfte tuon で *jm. wohl tun* 「人の喜びとなる」「人を喜ばせる」の意味になるが、ここでは人の3格に当たるのが libe unde sinne である。4行目の diu も関係代名詞であるが、ここは前行の程度を表わす副詞 als と相関的に用いられ、Nhd. の *so ..., dass ...* と同じようなかかり方になり、直訳すれば、「心にそしてまた気持ちにも食べ物を与えるほど、奥底から肉体と感覚にとって好ましいかぐわしい愛」ということである。

24) は愛の洞窟の中で水晶のベッドに后イゾルデと甥のトリスタンが、間に抜き身の剣を置いて背を向けあって眠っているのを、洞窟の上の小窓からマルケ王が密かに覗き見たときの情景である。ふたりの間の不倫の愛を疑いつつ、抜き身の剣を間に置いて眠る姿を見てそれを否定したい王の揺れる心情が描写され、王はイゾルデの美しさに改めて彼女への思いをかきたてられる。2格 libes での押韻は今回考察の対象にした中高ドイツ語の作品の中でこれが唯一の例である。

2.5. 『イタリアの客人』に見られる lip

この作品には lip が91度現われ、38度が行末でその押韻相手は wip が37度、belip が1度である。まず、この belip の例から始めよう。

25) dâ ist ez alsô geschriben, / swelich wîp niht ist beliben /

ein jâr ân man, daz ir lîp / ân guoten namen dan belîp. (5615-18)

そこには次のように書かれている、女性が夫を亡くして一年もそのままいなければ、彼女は優れた品格のない女性であると。

この例の1行目最初の dâ はその前に出てきた phaht すなわち人々の行動規範を

規定した倫理書のことであり、「男が妻をなくした場合、すぐに別の女性を迎えるのはいかがなものか。せめて一年はそんなことを避けた方がよい」ということに続けて女性についても同じことを心得るようにと論ずるところである。swelich から ân man までは Mhd. 独特の関係文でここでは *wenn* 文に相当するが、その関係文で表わされた女性を3行目の所有代名詞 *ir* で受ける。*ir lip* は動詞 *beliben* (nhd. *bleiben*) の接続法現在 *belip* と押韻するために *si* の代わりに用いられたものである。この接続法の用法は間接話法である。

次にいささか長くなるが、*lip* の用例を2例含んだ一節を引用しよう。

- 26) *Wip schœne ân sin und ân lêre, / diu hât ir lip mit kleiner êre. /*
diu schoen vil lihete den êren scheid, /
wirt si niht mit dem sinne beleit. / ist âne sinne ein schœne wip, /
diu hât zwei gebende an ir lip / diu si ziehent zundingen, (869-75)
 分別と教養を具えない女性は名誉をもってその身を保てない。
 美しさに分別が伴わなければ、その美しさは往々にして名誉を
 傷つける。美しい女性に分別がなければ、その女性は
 その身に、破滅をもたらすふたつの枷をはめることになる。

ここには *ir lip* が2度現われている。これらの *lip* にははっきりとした意味があるのかどうか判別が難しいが、ふたつ目の *ir lip* は再帰代名詞に相当する用法で、*wip* と韻を踏むための書き換えだとみなすことができよう。これは3格なので本来は語尾の付いた *libe* となるべきところだが、1格の *wip* との押韻のため語尾が落ちている。

ところで、この例には中高ドイツ語の文体上・言語上の特徴が多く現われているので、それについて触れておこう。先ず語形について見ると、末尾音が欠けた形を含めて *schœne* が3度見られるが、*-e* は変化語尾ではなく、*schœne* が本来の形である。この語は Ahd. の *scôni* が *-i* によって幹母音にウムラウトを起こし、さらに、その後 Mhd. の時期に末尾の完全母音 *-i* が *-e* に弱化したもので、形容詞でもあり名詞でもある。1行目の形容詞はかかる名詞に後置されているのに対し、5行目では前置されている。3行目は名詞でリズムの関係で語尾が省かれているのであろう。最後の *zundingen* は前置詞 *ze* と名詞 *undinc* の複数 *undinge* の

融合形である。

3行目の *scheit* は弱変化動詞 *schaden* の直説法3人称単数現在形 *schadet* が縮約した形である。この縮約形はふつう、*haben* の3人称単数 *habet* が *hât* になるように *schât* である。しかしこの作品では *schât* の語形と並んで *scheit* もあり、行中では *schât*、行末では *scheit* と区別して用いられている(※41)。

次に文体上の特長について2点挙げておこう。2行目の *klein* は元来は *glänzend, glatt* の意味で、それが *rein, zierlich, fein, zart* などの意味(※42)に移行し、最後に *klein, gering* などを意味することになったもので、Mhd. ではいわゆる *Litotes* (曲言法)として *kein* の代わりにまったくの否定を表わすことも多く、ここもその例である。4行目と5行目はいずれも定動詞が文頭に置かれた疑問文を条件文に転用したもので、このように上位文の後にも前にも位置することが可能であった。

さて、*lip* に話を戻すと、語尾の付いた形は2格 *lib̄s* が1例、*libes* が12例とも行中に置かれるほか、*libe* が26例見られ、そのうち *wibe, schribe* とそれぞれ2度ずつ押韻している。*libe* はそのほとんどは単数3格であるが、1例だけ複数1格があるので、最後にそれを挙げておこう。

27) *Ez ist wâr daz ich schribe, / des wibes unde mannes libe /*
sint zem valle bereitet gar. (9571-73)

私が書いていることは本当のことである。すなわち、男の肉体も
 女の肉体もすっかり破滅への準備がなされている。

ここは魂と肉体の関係を主人と召使の関係になぞらえて、「主人が気をつけて防がないと、召使はしばしば悪いことをするのと同じように、魂が肉体にしっかりと命じなければ、肉体はすべきでないことを止めないだろう」ということが述べ

41 *scheit* の語形は決して無理やり作ったものではなく、オーストリア、バイエルンに見られる語形である。この作品では *schât, scheit* とも7例ずつ用いられ、*schât* はすべて行中の1音節が適当なところで、*scheit* は5度押韻に用いられている。他に本来の形 *schadet* が8度すべて行中に現われている。このように詩人はリズムを整え脚韻を踏むために、さまざまな可能性を駆使するのである (Vgl. Anm. von H. Rückert zu V. 871. 『中世ドイツ叙事文学の表現形式』233ページ参照)。

42 この肯定的な意味は Nhd. の *Kleinod* に残っている。

られた後の部分であるので、この libe は人の書き換えではなく、「肉体」の意味で複数である。lip が複数で用いられることはきわめて稀で、辞書には先に示した『パルツィヴァール』の1例しか挙げられていないが、ここは schribe と押韻するためにはやむなくこの形になっているのであろう。

3. おわりに

名詞 lip については Mhd. のテキストを読んでいるときに、人称代名詞でよさそうなところでよく見られ、しかも大抵は wip を相手に押韻していたので、かねがね一度正確に調べてみたいと思っていた。今回の調査で、押韻に関して両語はきわめて密接に結びついているが、人称代名詞や名詞の書き換えでは作品によって大きな差があることが改めて明らかになった。最後にここで考察の対象にした6作品における lip の用例数と wip による押韻数を一覧表にして示し、その特徴をまとめてこの小論を締めくくりたい。

	Otfrid	Nib.	Iwein	Parz.	Trist.	W. Gast
lip* (うち押韻数) (対 wib) 押韻の比率	38 (12) (12) 31.58%	192 (179) (179) 93.23%	105 (53) (53) 50.48%	222 (124) (123) 55.86%	118 (52) (52) 44.07%	91 (38) (37) 41.76%
libe (うち押韻数) (対 wibe)	44 (40) (3)	11 (0) (0)	26 (7) (7)	36 (20) (20)	63 (23) (22)	26 (4) (2)
libs (うち押韻数)	0	0	0	3 (0)	0	1 (0)
libes (うち押韻数) (対 wibes)	9 (4) (1)	11 (0) (0)	10 (0) (0)	12 (0) (0)	24 (1) (1)	12 (0) 0 (0)
合計 (うち押韻数) (対 wip, wibe[s])	91 (56) (16)	214 (179) (179)	141 (60) (60)	273 (144) (143)	205 (76) (75)	130 (42) (39)
作品の全行数	7416	9516	8166	24810	19548	14752
全行数に対する lip 使用数の比率	1.23%	2.25%	1.73%	1.10%	1.05%	0.88%

(*Otfrid では末尾の母音が濁音の lib 形であるが、ここでは lip にまとめた)

はじめに述べたようにオトフリトは宗教文学であるだけに、lib は「生命」、「生涯」などの他に「永遠の命」という意味で用いられることも多く、人称代名詞の代わりにするいわゆる迂言用法は2例しかない。一方、押韻に関しては最初の本格的な脚韻作品であるので相当苦勞し、lib もさまざまな相手と韻を合わせてい

る。中でも3格 *libe* による多様な押韻は Mhd. の作品に比べると大きな相違を示している。『パルツィヴァール』や『トリスタン』でもこの形による押韻は比較的多いが、その押韻相手は語尾のない *lip* の場合の *wip* 同様ほとんどが *wibe* であり、Mhd. の作品では押韻に関して *lip* の相手は *wip* というようになりにパターン化していると言える。

Mhd. の作品の中ではとりわけ『ニーベルンゲンの歌』で *lip* の語形が押韻に多用され、ほぼ押韻用の語とでも言えるほどである。また迂言表現としても他の作品と比べてさまざまな組み合わせを示している。つまり、他の作品では *lip* による迂言表現としては、所有代名詞や冠詞あるいは人称代名詞の2格が *lip* と結びつく場合がほとんどであるのに対し、『ニーベルンゲンの歌』ではそのような結びつきと並んで形容詞や名詞の2格さらには人名の2格 + *lip* がきわめて多く、行の終りを力強い1音節の男性韻で締めくくる。ここに英雄叙事詩としてのこの作品の特徴がよく現われている。宮廷叙事詩の中では『パルツィヴァール』がこのような結びつきを比較的多く示し、*lip* に語尾の付いた形の用例数も多く、そこにこの作品の表現の多様性を看取れるが、全行数との比率で見ると、*lip* の使用率はむしろ『イーヴァイン』の方が高い。

lip, *libe* による迂言表現は宮廷叙事詩では『パルツィヴァール』に多く、『イーヴァイン』にも比較的に利用されているが、『トリスタン』では非常に少ない。また *lip* による押韻も全用例の半分以下である。『イタリアの客人』は *lip* の用例数、使用率、迂言表現ともここで扱った Mhd. の作品の中で最も少ない。この作品は教訓詩であり、詩人が当時の社会を批判的に分析し、僧侶の墮落を糾弾し、騎士のあるべき姿、あの世での救いを得るためのこの世での身の処し方を騎士社会の聴衆に語り聞かせる。並外れて強いゲルマンの勇士の英雄的行為を強調する英雄文学や、華やかな宮廷社会の豪華さ、そこに集う作法正しい騎士たちの活躍を描写する宮廷叙事詩とは内容的に大きく異なる。それが *lip* の語法の違いにも表われていると思われる(※43)。このように名詞 *lip* ひとつ見ても、ジャンルにより、また作品によってその用法に大きな違いがある。

(たけいち・おさむ 関西大学文学部教授)

43 動詞の現在形が多いということなどにもジャンルの違いが表れている(『中世ドイツ叙事文学の表現形式』202-3ページ参照)。

引用原典および主要参考文献

- Der guote Gêrhart von Rudolf von Ems.* Hrsg. von John A. Asher, 2., revidierte Auflage, Tübingen 1971.
- Gottfried von Straßburg: *Tristan.* Nach dem Text von Friedrich Ranke, neu hrsg., ins Neuhochdeutsche übersetzt, mit einem Stellenkommentar und einem Nachwort von Rüdiger Krohn, 2., durchgesehene Auflage, 3 Bände, Stuttgart 1981.
- Hartmann von Aue: *Iwein.* Hrsg. von G. F. Benecke und Karl Lachmann, neu bearbeitet von Ludwig Wolff, 7. Ausgabe, Bd. 1: Text, Berlin 1968.
- Kudrun.* Hrsg. von Karl Bartsch, neue ergänzte Ausgabe der 5. Auflage, überarbeitet und eingeleitet von Karl Stackmann, Wiesbaden 1980.
- Das Nibelungenlied.* Nach der Ausgabe von Karl Bartsch, hrsg. von Helmut de Boor, 22. revidierte und von Roswitha Wisniewski ergänzte Auflage, Mannheim 1988.
- Otfriids Evangelienbuch.* Hrsg. von Oskar Erdmann, 6. Auflage, besorgt von Ludwig Wolff, Tübingen 1973.
- Tatian.* Hrsg. von Eduard Sievers, 2., neubearbeitete Ausgabe, Unveränderter Neudruck, Paderborn 1966.
- Der Wälsche Gast des Thomasin von Zirclaria.* Hrsg. von H. Rückert, mit einer Einleitung u. Register von F. Neumann, Berlin 1965.
- Wolfram von Eschenbach: *Parzival.* Mittelhochdeutscher Text nach der 6. Ausgabe von K. Lachmann. Übersetzung von Peter Knecht, Einführung zum Text von Bernd Schiroke, Berlin / New York 1998.
- Benecke, Georg F. / Müller, Wilhelm / Zarncke, Friedrich: *Mittelhochdeutsches Wörterbuch*, I-III; Reprografischer Nachdruck der Ausgabe Leipzig 1854-66, Hildesheim 1963 [= BMZ].
- Benecke, Georg F.: *Wörterbuch zu Hartmanns Iwein.* 2. Ausgabe, besorgt von E. Wilken, genehmigter Neudruck der Ausgabe von 1874, Wiesbaden 1965.
- Grimm, Jacob: *Deutsche Grammatik* Bd.IV. Hrsg. von Gustav Roethe und Eduard Schröder, Reprografischer Nachdruck der Ausgabe Gütersloh 1898, Hildesheim 1967.
- Hartmann von Aue: *Iwein.* Mit Anmerkungen von G. F. Benecke und K. Lachmann, 6. Ausgabe, unveränderter Nachdruck der 5., von Ludwig Wolff durchgesehenen und ergänzten Ausgabe, Berlin 1966.
- Kelle, Johann (Hrsg.): *Otfriids von Weissenburg Evangelienbuch. Text Einleitung, Grammatik Metrik, Glossar.* III. Band, Neudruck der Ausgabe 1881, Aalen 1963.
- Der Nibelunge Nôt.* Hrsg. von Karl Bartsch, mit den Abweichungen von der Nibelungen Liet, den Lesarten sämtlicher Handschriften und einem Wörterbuch, II.2, Reprogra-

fischer Nachdruck der Ausgabe Leipzig 1880, Hildesheim 1966.

Ogino, Kurahei / Shigeto Minoru: *Wortindex zu „Der Wälsche Gast“ des Thomasin von Zirclaria*, erstellt am 19. 8. 1991 (Manuskript).

Paul, Hermann: *Mittelhochdeutsche Grammatik*, 19. Auflage, bearbeitet von W. Mitzka, 2. Druck, Tübingen 1966.

Piper, Paul (Hrsg.): *Otfrids Evangelienbuch. Mit Einleitung, erklärenden Anmerkungen und ausführlichem Glossar*, 1. Theil: Einleitung und Text, 2., durch Nachträge erweiterte Ausgabe, Freiburg i. B. und Tübingen 1882; 2. Theil: Glossar und Abriss der Grammatik, Freiburg i. B. 1887.

Wolfram's von Eschenbach Parzival und Titurel. 3 Theile. Hrsg. von Karl Bartsch, Leipzig 1875-77 (Deutsche Classiker des Mittelalters, 9. Band: Wolfram von Eschenbach Parzival und Titurel).

Wolfram's von Eschenbach Parzival und Titurel. 2 Teile. Hrsg. von Ernst Martin, Halle 1900 u. 1903.

武市修『中世ドイツ叙事文学の表現形式——押韻技法の観点から』、近代文芸社 2006年

Nominale Umschreibungsausdrücke unter besonderer Berücksichtigung der Endreimdichtung: im Fall von *lip*

Osamu TAKEICHI

Im Althochdeutschen ist das Substantiv *lib* sowohl maskulin als auch neutral. In Otrfrids Evangelienbuch erscheint es 91mal, und zwar als neutral und wird hauptsächlich in den eigentlichen substantivischen Bedeutungen von „Leben, Lebenskraft, Lebenszeit, Lebenswandel“ und selten von „Geschick“ benutzt. Es dient, nach J. Kelle und P. Piper, nur zweimal zur Umschreibung der Person.

Hinsichtlich der Reimbezüge dieses Wortes steht es 56mal am Versende, und seine dativische Form *libe* spielt eine große Rolle. Sie reimt 40mal von 44 Belegen mit verschiedenen Wörtern: zum Beispiel 14mal auf das flektierte Possessivpronomen *thine*, je fünfmal auf *sine* und *klibe*, sonst begegnet ihr unreiner Reim auf *liebe*, *liabe*, *ungiloubige* usw. Mit der dativischen Form vom Substantiv *wib* bildet sie nur dreimal einen Reim. Die flexionslose Form *lib* tritt dagegen 12mal von 38 Belegen im Reim mit *wib* auf. Otrfrid bemüht sich offensichtlich um Reimbildung.

Dieses Wort ist im Mittelhochdeutschen ausschließlich maskulin und erscheint, wenn unflektiert, im Auslaut verhärtet. Reimbezüglich dient die Wortform *lip* zum Reimen auf *wip*: im Nibelungenlied 179mal von 192 Belegen, im Iwein 53mal von 105, im Parzival 123mal von 222, im Tristan 52mal von 118 und im Wälschen Gast 37mal von 91 Belegen. Außer *wip* nimmt *lip* nur je einmal im Parzival und im Wälschen Gast ein anderes Wort zum Reimpartner. Die dativische Form *libe* wird hingegen je nach Dichter unterschiedlich benutzt: Sie erscheint im Nibelungenlied elfmal im Versinneren, sonst reimt sie auf *wibe* im Iwein siebenmal von 26 Belegen, im Parzival 20mal von 36, im Tristan 22mal von 63 und im Wälschen Gast zweimal von 26 Belegen. Außer *wibe* hat *libe* ein anderes Wort als Reimpartner nur einmal im Tristan und zweimal im Wälschen Gast. In den mittelhochdeutschen Werken sind die beiden Wörter *lip* und *wip* zum Reimen typisiert.

Was die Umschreibung der Person durch *lip* betrifft, handelt es sich meistens um

die Verbindungen von *lîp* und einem Possessivpronomen oder dem Genitiv eines Personalpronoms. Das Nibelungenlied zeigt auch in dieser Hinsicht seine Eigentümlichkeit: Hier verbindet sich *lîp* nicht nur mit dem Possessivpronomen, sondern auch oft mit einem genitivischen Personennamen oder Substantiv mit adjektivischen Attributen, wie zum Beispiel:

mit ir kom hêrliche vil maniges edeln recken lîp. (Nib. 1303,4)

Im folgenden Beispiel mit einem genitivischen Personalpronomen kann man den Charakter dieses Werkes als Heldenepos erkennen.

sô het er dar inne krefte genuoc,

wol zwelf manne sterke zuo sîn selbes lîp. (Nib. 337, 2-3)

Diesen Beleg ordnet K. Bartsch in seinem Wörterbuch der Gruppe „Umschreibung der Person“ zu. Dieses *lîp* steht im Dativ, deshalb sollte es eigentlich *lîbe* lauten. Damit könnte es auf das dativische *wibe* reimen. Aber dann würde dieser Abvers vierhebig und die Kadenz zweisilbig klingend, was diesem Heldenepos nicht passen würde. Im Unterschied zu den höfischen Epen, wo die Verse vierhebig sind und die Kadenzen manchmal zweisilbig klingend weiblich schließen, enden die Abverse im Nibelungenlied meistens mit der einsilbig männlichen Kadenz starktonig.

Der Wälsche Gast stellt den Gegenpol zum Nibelungenlied dar. In Hinsicht auf die Zahl der Belege, den reimbezüglichen Prozentsatz und Umschreibungsausdrücke von *lîp* ist jener deutlich in der Minderheit. In dieser Spruchdichtung analysiert der Dichter die damaligen sozialen Verhältnisse und stellt dem ritterlichen Publikum das angemessene Benehmen als christlicher Ritter dar. Sie steht inhaltlich im scharfen Kontrast zur Heldenepik, wo heroische Taten der starken Ritter vorgestellt werden. Dieser gattungsmäßige Unterschied ist der Gebrauchsweise von *lîp* einigermaßen zu entnehmen.